

揺らぎの中の共生倫理

——フィリピン農村社会における資源利用の交渉現場から——

平成 25 年 編入学
派遣先国：フィリピン共和国
白石 奈津子

キーワード：少数民族、農村地域開発、世帯経済、共生倫理、マンヤン

対象とする問題の概要（背景）

現在「発展途上国」と呼ばれる国々の多くでは、国境を越え、先進国の工業部門やサービス産業に従事する人々が増加している。こうした動きが地方社会や経済に与える影響については、かつて有効であった都市－農村という二項対立的な理解を超える、新たな視点で追及していくことが求められる。ダイナミックな人々の移動は、純粹に経済的な事柄に留まらず、「伝統的」に培われてきた地方社会の構造にも大きな変化を与え、さらに、新たな文化、集団との接触は、人々のアイデンティティや価値観に、様々な「揺らぎ」をもたらしている。

フィリピンは、海外出稼ぎ者からの送金額が名目 GDP の 10% をも占める、東南アジアの中でも突出した「出稼ぎ国家」であり、そのような移動する人々に着目した研究が、近年数多く蓄積されている（長坂 2009 津田 2003 など）。同時に、かつて「緑の革命」を主導した IRRI（国際イネ研究所）の位置する同国においては、その影響を含め、村落社会システムを支えてきた農業、農村の基盤に関する研究も、多岐にわたり存在する。（Hayami2000、梅原 1992、高橋 1965、バリサカン 1994 など）



（調査集落に暮らすマンヤン女性：農作業の合間に）

研究目的

派遣者の関心は、上記のようなグローバルかつダイナミックな社会の変化の下で、旧来の社会制度がどのように変容し、現代的な形において人々の生存を支えているのか、という問題にある。特にその変容の形を動的に捉えることで、中心・周辺という関係を超えた地方社会の持つ豊かさ、空間的可能性を考える。

本研究は、以上の問題を、“落穂”をはじめとした生存資源を巡り、フィリピン・ミンドロ島の2つの民族（タガログ/マンヤン）の間で繰り返される日々の交渉を通して検討する。それを特に、近年注目を集める『民族をはじめとした社会関係の境界に生じる「揺らぎ」』というテーマ（宮永 2000 など）、その揺らぎが生じる源泉を、人々に共有された共生倫理の観点から明らかにすることで上記のテーマにアプローチすることを目指す。彼らが繰り返し出遭う日常の中に深く浸透した、正しさやあるべき姿を規定する原理としての倫理が、如何なる形において、グローバル化をはじめとした現代社会の動きによ

る影響を受けつつも、地方という空間を生きていく可能性を将来につないでいるのか明らかにしていきたい。

フィールドワークから得られた知見について

本派遣においては、上記の研究課題に対し、以下の3つの予備的課題を設定した。即ち、1)来年度行う長期調査に向け、必要な語学力を実地において学び、向上させる事、2)首都圏の研究機関の状況を把握し、今後のネットワーク形成の足掛かりとする事、3)調査地となる農村部において、新たなテーマに関する予備調査を行い、関係機関での資料収集をする事、の3点である。

まず、第一の目的である語学研修は、マニラ首都圏にある私立の語学学校に滞在して行った。授業は、教師と一对一のマンツーマン形式のものを、1日2時間、毎日受講した。文法事項に関しては、この滞在期間に、最低限必要とされる部分をすべて終了することができた。



(派遣者と講師、事務スタッフ)



(受け入れ機関である第三世界研究所の所長と)

第二の目的であるマニラ首都圏における研究環境の把握、及びネットワーク形成については、長期調査において在籍を予定している国立フィリピン大学の第三世界研究所、及びその図書館を中心に活動した。スタッフとも良好な関係を築くことができ、また、同研究所主催で開催される各種セミナーに出席できた。それにより、主な研究関心である地方の問題を、如何にして、より広い問題系中で検討すべきかを考えるにあたっての有用なヒントを得られた。さらに、調査集落に生活する人々と同民族であるマンヤンの集落を、コミュニティ開発支援の観点から調査、サポートしている現地研究者と

知り合い、有益な情報や助言を頂くこともできた。これらのネットワークを、今後有効に活用していきたい。

最後に、第三の目的である現地調査は、滞在期間が短かったため、マンヤンの集落内のみで行った。近隣地区との関係は、次回調査の課題である。論文のメイントピックである生存資源の確保とそれに関連するタガログとの関わりは、5月に訪問した時に比較して、活発に展開されている印象であった。これは、今回の滞在が雨季にあたり、山地で農作業を行うことに困難を伴う場合が多かったためと推測される。中でも特に、派遣者の研究における特徴的着眼点である「落穂ひろい」の実施が、かなり精力的にみられ、連日多くの世帯で、収集してきた落穂を脱穀している光景がみられた。

今回の滞在で得た情報により、こうした活動には、季節的な変動があり、事例ごとのばらつきがあることがよりクリアになった。

また、山地の利用に関して、国家制度との橋渡しの支援を行っ



(世帯での食事の一例)

ている NGO から資料を入手することもできた。



(家屋)



(家の裏でバナナの植え替えをする女性)



(タロイモ (Gabi) の出荷作業の様子)

今後の展開・反省点

今後の展望としては、今回見聞きしてきた事柄をベースに、来年度より長期調査を行う予定である。また、昨年度までに行った調査内容に、今回新たに得た情報を加え、今年度中に日本地理学年報への投稿を予定している。

今回の派遣期間で得てきた情報により、長期調査におけるデータ収集のイメージはより鮮明になったが、それを具体的にどのような手法、観点から把握していくか、等、十分な準備を行った上で調査を実施する必要性を強く感じた。

また、今回の派遣における第一目的であった語学習得に関して



(収穫を手伝う子供)



(ランソーネズ (Lansonez) の収穫風景)

は、依然として継続的な努力が必要である。渡航前は、日常会話もおぼつかない状態であったのが、今回の派遣を通じて、日常会話の中で自分の考えていることをきちんと伝えることができるようになった。その点は、十分な成果をあげることができたと考える。今後は、語彙力の強化を中心に、さらなる自主学習に努める予定である。

【参考文献】

- アルセニオ・M・バリサカン, 野沢勝美編. 『フィリピン農村開発の構造と改革 : フィリピン日本共同研究』 /-- アジア経済研究所, 1994. -- (ASEAN 等現地研究シリーズ ; no. 21).
- 梅原弘光著. 『フィリピンの農村 : その構造と変動』 /-- 古今書院, 1992.5.
- 高橋彰著. 『中部ルソンの米作農村 : カトリナン村の社会経済構造』 アジア経済研究所, 1965. -- (研究参考資料 ; 第 85 集).
- 『国際移民労働者をめぐる国家・市民社会・エスニシティの比較研究 : 経済危機の中のアジア諸国における出稼ぎフィリピン人を素材として』 / 研究代表者津田守. -- [大阪外国語大学], 2002.3. -- (科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書 ; 平成 11-13 年度).
- 長坂格著. 『国境を越えるフィリピン村人の民族誌 : トランスナショナリズムの人類学』 /-- 明石書店, 2009
- 宮永國子著. 『グローバル化とアイデンティティ』 世界思想社, 2000
- .Yujiro Hayami and Masao Kikuchi “A rice village saga : three decades of green revolution in the Philippines” -- IRRI. Macmillan, 2000.